

平成30年度 文部科学省委託

教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び

(アクティブ・ラーニング) の視点からの学習・指導方法の改善の推進

県事業名

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善充実事業

平成30年度 研究の取組 (中間まとめ)

拠点校：大館市立城南小学校
大仙市立大曲小学校
大仙市立大曲中学校



平成31年3月 秋田県教育委員会

はじめに

本県では、これまでの全国学力・学習状況調査の調査結果から、県内小・中学校において安定した成果を示している学校や課題の改善状況が顕著である学校に見られる特長を分析し、「全校体制によるPDCAサイクルの確立」や「子どもたちの思考を促し深める授業づくり」などの学力向上を支える要素を見だし、各学校に示してきた。このことを受けて各小・中学校では、自校の児童生徒の実態に応じて、児童生徒が問いをもち、他者と関わりながら主体的に問題解決に取り組む探究型の授業づくりの工夫を積極的に進め、その有効性を近隣の学校どうしが共有するなどしてきている。

しかし、学校質問紙調査の結果を分析する中で、本県の多くの小・中学校は、授業の中に話し合う活動を取り入れてはいるものの、児童生徒の考えを広げ深めるための指導の在り方については改善の余地があるという意識をもっていることが見えてきた。そこで、本県の各学校の授業改善の取組が児童生徒の資質・能力の育成につながるものになるよう、次のことについて一層の改善・充実を図る必要があると考える。

学習活動の表面的な様相のみにとらわれることなく、各教科等の特質に応じた学びの深まりにつながるよう、児童生徒が各教科等の見方・考え方を働かせて取り組む質の高い学習活動を展開すること。

そこで、県教育委員会では、平成30年度からの2年間、文部科学省の委託を受け、県事業名「『主体的・対話的で深い学び』の充実に向けた授業改善充実事業」に取り組むこととした。研究推進に当たり、県内の小学校2校及び中学校1校を拠点校に、県立高等学校1校を協力校とし、研究課題を次のとおりとした。

研究課題：拠点校が研究の重点とする教科等において、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせた「深い学び」の実現に向かうよう、授業改善に取り組むこと。

また、各拠点校においては、次の内容について取り組むこととした。

- (1) 主に次の学習活動における指導の手立てについて、各教科等の特質を踏まえるとともに、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して工夫改善を図る。
 - ア 問題を見だし解決の見通しをもつ活動
 - イ 他者と協働して考えを形成し、自己の考えを広げ深める活動
 - ウ 知識や技能を活用したり知識等を相互に関連付けたりして深い理解につなげる活動
 - エ 自身の学びを振り返り変容を自覚する活動
- (2) 全教職員による共同研究を機能させるための授業研究協議会の内容及び方法等を工夫する。
- (3) 拠点校の取組の充実を図るために、市内の小・中学校と協力して取り組む体制を構築する。
- (4) 拠点校である小・中学校の授業改善の取組を、県教育庁高校教育課が指定している「探究活動等実践モデル校」の県立大曲高等学校等と共有するなどし、小・中学校と高等学校が授業改善に連携して取り組むための効果的な方策等を探る。

主体的・対話的に学ぶ子どもの育成
～協働で学びを深める「シンカタイム」と
自己を見つめ次の学びにつなげる「振り返り」～

大館市立城南小学校

1 本研究に係る自校の現状と課題

- ・本校は、平成23年度～26年度の4年間、「学び合いを通して確かに学ぶ城南スタイルの定着」というテーマで、算数科の研究に取り組んできた。その後、国語科の研究も行うようになって現在に至るまで、児童が見通しをもって自力解決をし、学び合いで課題解決をしていくという「主体的な学び」の視点と「対話的な学び」の視点からの授業改善については、多様な手立てを工夫して取り組んできた。
- ・児童は、学校の授業のみならず家庭学習においても意欲的で、家庭学習ノートの実践も低学年から継続しており、児童の学ぶ姿には良好な状況が見られる。また、それが諸調査の結果にも表れている。
- ・「深い学び」の視点については、まだ十分とは言えず、既得の知識や技能を活用して考えさせたり、児童に学びの価値や自らの変容を実感させたりするための一層の授業改善が必要である。



〈シンカの視点について意見交換〉

2 主な取組内容

- ・「他者と協働して考えを形成し、自己の考えを広げ深める活動」における指導の工夫として、学び合いの場面を充実させるために、一人一人が自分の考えをもって学び合いに参加するようにさせる。そのために、自力解決ができるように見通しの立て方を工夫する。また、学び合いでは、それぞれの考えや立場を認め合いながら学びを深めていくことができるように、教師の働き掛けの工夫をする。
- ・「自身の学びを振り返り変容を自覚する活動」における工夫として、授業のねらいに応じた振り返りの視点を明示するなど、学んだ内容のみならず、「対話的な学び」を通じた自分の学び方や考え方の変容、友達の学び方のよさなどに気付くことができるようにするための手立ての工夫に取り組む。
- ・「授業研究会」の工夫として、広く意見交換ができるよう、小集団によるワークショップ形式を取り入れた協議を行う。その際、育てたい資質・能力に照らして見取った児童の姿にふれ、教師のどのような手立てが有効であったかを明らかにしていくようにする。また、研究推進については低・中・高学団部を中心とした全校体制で取り組むようにする。

3 取組の具体

児童と共に単元を構成し、個々の考えを基に話し合う「シンカタイム」を通して学び合い、自己を見つめ、学びをつなげる振り返りを行うことにより、主体的・対話的に学ぶ子どもが育つのではないかと考えた。

(1) 主体的な学びに導く単元構成

- ① 教師は、学習の系統性を把握し、身に付けさせたい力を明確にした単元を構想する。
- ② 国語科では、児童は、初発の感想を基に、どのような見方や考え方を活用したら「付けたい力」が身に付くかを考えて学習計画を立てる。

(2) 考えを広げ、深める「シンカタイム」

「シンカタイム」とは、児童のより主体的な学び合いを目指して、なるべく教師に頼らず、児童主体で課題解決に向かう学び合いを目指した実践である。

- ① 見通しの場面で、視点を明確にして自力解決をした後に話し合いをさせる。
- ② シンカタイムで学びを深めるための「シンカの視点」を用意して発問することで、ねらいに迫る。
- ③ シンカタイムについて、教師も児童も共通理解するために教育専門監によるオリエンテーションを実施した。



〈学び方のオリエンテーション〉

シンカタイムのポイント

- 「シンカタイム」のカードを黒板に掲示し、子ども主体の時間を意識させる。
- 高学年においては、教師の介入を少なくして行う。
- 単元のどの時間に「シンカタイム」を設定するのが効果的かを考えて計画する。
- 誰でも答えられる発問を取り入れて、全員が挙手できる場面を設定する。
- 途中までしか答えられなくても安心して挙手ができるようにする。発言が止まっても、「助けます。」と助け合って学び合いを継続させる。
- 「分かりました。」「よいと思います。」「似ています。」「他にあります。」等の言葉で発言をつなげる。
- 反応言葉「あいうえお」を活用する。

(3) 自己を見つめ、学びをつなげる振り返り

- ① 振り返りの視点を掲示しておく。
- ② 児童の振り返りを授業の中で共有したり、教師が適切な価値付けをしたりする。
- ③ 児童の振り返りを支援するために、1時間の思考過程が分かる板書をしたり、学習コーナーに単元の学びが見える掲示をしたりする。

振り返りの視点(例)
○分かったことや気付いたこと
○学びの過程や結果
くしたら、くできた。
○交流での気付き
くな考えもあるんだ。
○活用・次につなげる
くでもできるかやってみ
たい。
くはどうなるのだろう。

4 研究の成果

「主体的・対話的に学ぶ子どもの育成」を目指して、「児童と共につくる単元計画・シンカタイム・振り返り」の三つの柱に絞って研究を進めたことは、目標が明確で、児童の変容にも表れている。

(1) 児童の変容

- ・アンケートでは、シンカタイム・振り返り・学習計画について、自分の成長を感じることが「よくある」、「ときどきある」と答えた児童は、90%以上だった。
- ・児童と共に学習計画をつくることにより、課題解決に向かって、見通しをもって主体的に学ぶ児童が増えた。
- ・自分が発表するだけで精一杯だった最初のシンカタイムから、聞き手を巻き込みながら発言するようになり、より対話的な学びになってきた。
- ・「振り返り」を共有することで、主体的な学びにつながる気付きがあった。

(2) 学力向上フォーラム参加者34名のアンケートより(4段階評価の平均)

1 児童生徒が主体的に取り組む授業	平均
①ねらいやゴールが明確で、見通しと目的をもって学習に取り組んでいた。	4.0
②終末の時間を確保し、学習したことを生かした習熟や、次への意欲や自己成長につながる振り返りが行われていた。	3.7
2 課題をもち、考え抜く力により解決を図る授業	
①児童生徒の発想に基づいた本質的で魅力ある「めあて」や「学習課題」を設定し、読解力・思考力・表現力を駆使して解決できる学習過程になっていた。	3.8
②児童生徒の特性や進度に応じて、考える時間や支援・手立てを保障していた。	3.7
3 集団で学び合い、全員がゴールへ到達する授業	
①様々な学習形態で児童生徒が共感的に学び合い、磨き合うことにより、学びが「しんか（進化・深化・真価）」していた。	3.8
②児童生徒相互の教え合いや助け合い（協働的学び合い）により、全員でゴールへ到達する喜びをもたせる環境づくりができていた。	3.9

〈自由記述より〉

- ・いつの時代でも授業改善は常に課題であると感じる。貴校の子どもたちの生き生きと授業に取り組む姿は、他校での目標となるものである。「ここまでできるのだ」という目標を得ることができた。(県外)
- ・子どもたちが言葉をつないでいく姿に感心した。シンカタイム、振り返りは、自己の考えを広げ、深めるための効果的な検討をする場、自己を見つめ、学びをつなげる振り返りの場となっていた。(県内)

5 研究のまとめと次年度の取組

今年度課題であった「既得の知識や技能を活用して考える」や「児童の学びの変容を自覚させる」について成果が見られたものの「深い学び」の達成については十分とはいえない。次年度は、ねらいに迫る「シンカの視点」の与え方と「効率的な児童の見取り」の在り方を探究することで、教師のコーディネート力の向上を図っていかなければならない。



〈学力向上フォーラムにおけるワークショップ型の授業研究会の様子〉

研究主題

深い学びにつなげるための指導の工夫と改善
～基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着、
主体的で対話的な学びの実践と深い学びへの挑戦～

大仙市立大曲小学校

1 本研究に係る自校の現状と課題

本校では平成29年度まで、児童が見通しをもって取り組む「主体的な学び」の視点とペアや小グループでの話し合いを機能させた「対話的な学び」の視点からの授業改善を行ってきた。その基底には「秋田の探究型授業」の基本プロセス（「学習の見通しをもつ」→「自分の考えをもつ」→「ペア・グループ・学級で話し合う」→「学習内容や学習方法を振り返る」）を置き、児童が学ぶ際の共通実践事項を決め、多様な手立てを工夫して取り組んできた。

このことにより、ペア・グループ等の小集団内では自分の思いや考えを進んで伝え合い、主体的に学ぶ児童の姿が多く見られるようになった。しかし、全体での学びの深まりにつながるような手立て・工夫についてはまだ課題が残っている。学級集団の学びの中で、既得の知識や技能を活用して考えさせたり、児童に自己の変容を自覚させたりする「深い学び」の視点で具体的な手立てを工夫することまで至っておらず、一層の授業改善の推進が必要であると考えている。



深い学びに向けた授業のプロセス(理科)
①見通し→ ②個(さぐる)→ ③グループ
↓
⑥振り返り←⑤個(加除修正)←④全体(深める)

本校は、個々には明るく素直な児童が多いものの、自分に自信がもてず、良好な人間関係を築けずに戸惑ったり、粘り強く取り組むことに苦手意識をもっている児童も少なくない。同じ場で学び合う児童が互いの知識や考えを有機的に結び付けて「深い学び」となったとき、自己有用感・自尊感情が高まるものと考えている。自己有用感・自尊感情の高まりを、児童が「深い学び」を具現化しているかどうかの指標の一つとして捉えることができると考えている。

2 主な取組内容

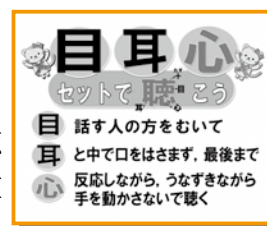
- (1) 知識・言葉をつなぐ学習としての「学び合い」の場の設定
- (2) 思考の再構築と自己の変容の自覚のための「振り返り」の実践
- (3) 実践につなげる共同研究体制の構築

3 取組の具体

- (1) 知識・言葉をつなぐ学習としての「学び合い」の場の設定

① 「聴くこと」の充実

平成29年度から、他の意見を聴いて考え、自分の意見を組み立てて発表することを重点とし、発表児童に対して「聴いている」という状態が伝わるように聴く、という姿勢を徹底した。発表児童が、聴者の反応から自分の意見の妥当性を考え、必要に応じて再構築しながら発表を修正することがで



く「聴くこと」の約束
(教室掲示)

きるようにするためである。さらに、自己有用感・自尊感情を高めることができるよう、学習の場での自己の存在の必要性が確認できるように取り組んだ。

② 「話すこと」の充実

「聴くこと」の充実を踏まえ、平成30年度に「話すこと」を充実させる取組を実践した。場面に応じて、「前に発表した人の内容にコメントしてから自分の意見を話す」ことを取り入れた。発表した意見についてコメントをしたり、もらったりし合う場面で、思考のつながりを意識させている。

③ 知識・言葉をつなぐ、学び合うための話し合い

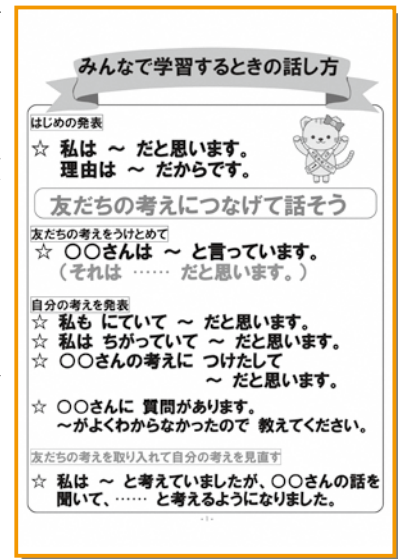
「学び合い」の場を構築するために、「話し合い」においては、次のことを全校共通実践事項として取り組んでいる。

＜児童は＞

- くらべて聴くことを意識する。
- つなげて話すための話型を活用する。
- 意見の根拠を添える。

＜教師は＞

- 発問を精選する。
- よい話し方を称揚し、教室内で価値付ける。
- 「なぜ」と問い返す。



＜「話すこと」の約束
(教室掲示)＞

(2) 思考の再構築と自己の変容の自覚のための「振り返り」の実践

① 自己の変容を捉えやすい板書の工夫

「自己の変容」とは「自分の思いや考えが初めと違うものになった」のみならず「思いや考えが強く確固としたものになった」「思いや考えが広がった」ことでもあることを教師・児童間で共通理解した。変容の契機となったポイントを振り返りやすいように板書構成を工夫している。

② 振り返りの視点の明確化

発達の段階に応じて振り返りの際の視点を明確化し、教室に掲示した。学習のねらいによって、児童が視点を選択し、振り返りを行う。自己の変容の契機を捉える視点2、自己の変容を捉える視点3は振り返りの重点としている。

2年生	4年生	6年生
ふり返り	ふり返り	ふり返り
★ わかったこと	★ わかったこと	★ わかったこと
★ 自分や友だちの考えの よかったところ	★ 自分や友だちの考えの よかったところ	★ 自分や友だちの考えの よかったところ
★ 学びあいで 自分のがんばり	★ 学び合いを通して 自分の考えがかわったこと	★ 自分の考えが 変わったり深まったりしたこと
★ わからなかったこと	★ もっと学習したいこと	★ もっと学習したいこと
★ もっと学ばせたいこと	★ 生活や学習で使いたいこと	★ 生活や学習で役立てたいこと

＜発達の段階に応じた振り返りの視点（教室掲示）＞

(3) 実践につなげる共同研究体制の構築

① 児童の学習状況に基づいた授業研究

児童にとっての「深い学び」について、児童の学習状況から見取り、発達の段階を中心とする「学年部」と教科の見方・考え方を中心とする「教科部」の二つの視点から研究を進め、二つの視点をクロスさせたところからより具体的な授業改善策について提案した。学習活動内に現れる児童の言動を個人内評価として捉え、各種調査結果、児童アンケート、教師アンケートの結果を踏まえ、児童個々の学習状況及び学級の学習状況を分析した。

② 児童の姿からの授業改善

研究協議会では、変容していく児童の姿と学習の過程での戸惑いを付箋に書き出し、小グループごとに協議を行った。児童の姿からの授業改善を目指し、協議の成果を共通実践事項とし、次時の児童の目指す姿として還元した。



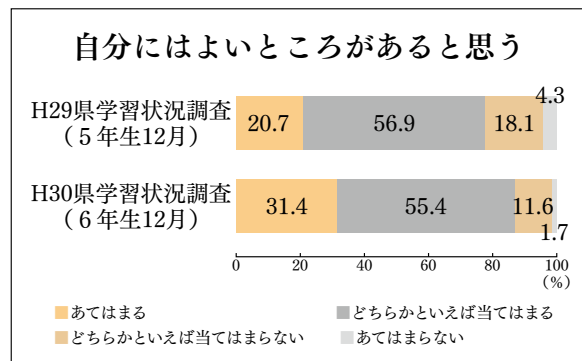
〈児童の姿からの研究協議〉

4 研究の成果

(1) 知識・言葉をつなぐ学習としての「学び合い」の場の設定

① 自己有用感・自尊感情の醸成

「聴くこと」「話すこと」を重点とした指導により、発表者は自分の考えが聴者に受け取られていることを確認することができた。また、聴者はジェスチャー、態度、表情などのノンバーバル・コミュニケーションを含めた自分の反応が発表者の思考を助けている自覚をもち、互いに自己有用感・自尊感情を高めることができた。



〈自己有用感・自尊感情の経年変化（H30年度6年生）〉

② コメントがつくる思考のネットワークと、個の意見の位置付けの確認

互いの意見へのコメントにより、学びの場での思考のネットワークの中で各々の意見がどこに位置付けられるかが確かめられ、自分の考えを構築する過程や自己の変容を児童自身が捉えることができるようになっていく。

(2) 思考の再構築と自己の変容の自覚のための「振り返り」の実践

① 自己の変容の自覚の促進

視点を明確にし、学習のねらいに即した振り返りを実践することにより「学習する前は、くぎぬきを短くもったほうが力が入りやすく簡単にくぎをぬくことができると思っていました。（中略）〇〇さんが作用点から力点までの距離を長くすることをアドバイスしてくれて（中略）友達の見解のおかげで簡単にくぎをぬく方法を見付けることができました。これからははさみを使うときに学習したことを生かしたいと思います。」（6年理科）等、既得の知識と自分の考えを組み合わせる、自己の変容の契機を明らかにする、教室を離れて学習内容を考える等々の振り返りができている。

5 研究のまとめと次年度の取組

(1) 学校の教育目標具現化のための資質・能力

学校の教育目標・目指す子ども像の具現化に向けて、発達の段階に応じて育成を目指す資質・能力を更に明らかにする。

(2) 「見方・考え方」を働かせた授業実践

発達の段階や各教科等の特質に応じて、学習活動中に児童が働かせる「見方・考え方」について児童と教師間で共通理解し、児童が「見方・考え方」を大切にする授業を展開する。

(3) 「振り返り」の充実

児童が自分の学びが深まった状態を捉え、視点を自分で決めて振り返りを行うようにする。「振り返り」がなぜ必要なのかを児童と教師間で共通理解しながら進めていけるよう、環境を整備する。

研究主題

社会との関わりをもって自ら学びを深める生徒の育成 ～思考の活性化を促す授業の工夫を通して～

大仙市立大曲中学校

1 本研究に係る自校の現状と課題

本校では、生徒の疑問や気付きを生かしながら学習課題づくりを行っており、「主体的な学び」の視点では指導の工夫がみられる。しかし、話し合い活動において生徒の考えを広げたり深めたりすることについては、手立ての工夫が必要である。このことは、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の結果からも明らかになっている。

これまでの研究の中で、生徒が見通しをもって取り組む「主体的な学び」の視点とグループによる話し合いを機能させた「対話的な学び」の視点からの授業改善については、多様な手立てを工夫しながら取り組んできた。生徒の学ぶ姿からは一定の成果が見られ、それが諸調査の結果にも表れている。しかし、生徒が既得の知識や技能を活用して考えたり、学びによる変容を自覚したりする「深い学び」の視点からの授業改善については、具体的な指導方法が実践されておらず、研究をより一層進める必要があると考える。

2 主な取組内容

- (1) 「他者と協働して考えを形成し、自己の考えを広げ深める活動」における指導の工夫

ペアやグループ等の少人数による話し合いと学級全体での話し合いを往還させる際の展開の工夫や教師の働き掛けの工夫に取り組む。

- (2) 「知識や技能を活用したり知識等を相互に関連付けたりして深い理解につなげる学習活動」における指導の工夫

既得の知識や技能の活用が図られる学習展開が可能となるよう、単元の指導計画の構成を工夫する。また、話し合いにおける他者との考えの交流を通して、自分の考えを見直したり再構築したりできる場面を設定することで、深い理解につなげるよう工夫する。

- (3) 既得の知識や技能を活用して考えさせたり、生徒に学びの変容を自覚させたりする「深い学び」の視点での具体的な手立ての工夫

各教科等の特質を踏まえた「深い学び」を生徒の姿で表したカードを教科ごとに作成し、授業改善の視点とする。

- (4) 授業研究会の工夫

広く意見交換ができるよう、小集団によるワークショップ形式等を取り入れた研究協議を行う。その際、教科の枠を越えて育成を目指す資質・能力に照らし合わせて見取った生徒の姿について協議し、教師のどのような手立てが有効であったのかを明らかにしていく。

3 取組の具体

- (1) 「秋田の探究型授業」の基本プロセスを機能させた授業づくり

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通し、「学習の見通しをもつ」「自分の考えをもつ」「ペア・グループ・学級で話し合う」「学習内容や学習方法を振り返る」の学習過程におけるそれぞれの段階を機能させた「秋田の探究型授業」を展開した。特に「ペア・グループ・学級で話し合う」活動では、学習場面におけるねらいと期待される効果に応じて「ペア」「グループ」「自由交流」などを使い分けた。また、他から学んだことを基に考える場面において、「更に追究したいことは何か」「新しく発見したことは何か」などの新たな課題に気付かせるような発問をした。



〈数学科の授業（自由交流）〉



〈理科の授業（マーケティングディスカッション）〉

(2) 思考の活性化を促し、「深い理解」を実現する単元（題材）づくり

新学習指導要領では、知識の理解の質を高めることが重視されている。そこで、各教科の共通実践事項として、単元（題材）など内容や時間のまとまりを見通して、「深い理解」の実現を目指す授業づくりを行った。特に単元（題材）づくりに当たっては、次の二つの視点を取り入れた。

- ① 各教科等の特質に応じた学習過程を通して習得する「知識及び技能」の明確化
- ② 知識を他の学習や生活の場面で活用する学習場面の設定

(3) P A D (Passive・Active・Deep) カードによる授業分析・改善

① 「思考の活性化」と「深い学び」

本校の研究のキーワードに「思考の活性化」がある。これは、生徒が主体的で対話的な活動をしていることを、Activeな状態と考え、授業において生徒がPassive（受動）の状態からActive（能動）の状態になることを意味している。生徒の思考がActiveな状態であり、かつ各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせている場面でDeep（深い学び）の状態が多く見られると仮定し、生徒の学ぶ姿から授業改善に取り組んだ。

② P A Dカード

Passive, Active, Deepの状態を各教科ごとに生徒の姿で表し、カードにまとめ、授業分析の指標とした。

③ 授業分析と授業改善

1時間の授業の中で、3～6名の生徒を抽出し、複数の教員がP A Dカードを基に分担して観察し授業分析を行った。また、授業後にそれぞれの生徒に対して「何が分かったか」「何ができるようになったのか」を聞き取り、授業の前後の変容について明らかにした。授業研究会では、この結果について協議し、改善点について教科の枠を越えて全員で共有化を図った。

(4) 授業研究会の工夫

指導案検討会・事前授業・研究授業・授業研究会を通した全員参加型の研究授業を行うとともに教科や校種を越えてお互いの授業を見合ったり、「深い学び」についての合同研修会を開いたりした。特に今年度は、「探究活動等実践モデル校事業」の指定校である県立大曲高等学校教員による授業研究会への参加を得て、専門的な立場からの助言をいただくことができた。授業研究を通した小・中・高の連携を進めることにつながった。

P A Dカード

Passive

- ・対話のフォーマットから目が離せない
- ・相手にわかりやすく伝えようとする意欲や構えが見られない

Active

- ・活動の見通しがもてている
- ・授業後も関心や意欲が続いている

Deep

- ・自分の経験を表現に生かそうとしている
- ・相手とのやりとりから得た新たな気付きや学びを次に生かしている

〈P A Dカードの抜粋（英語科）〉



〈小・中合同研修会〉

4 研究の成果

(1) 平成30年度秋田県学習状況調査の結果から

① 学力調査について（県平均との比較）

	国語	社会	数学	理科	英語
1年生	+0.8	+7.0	+3.4	-1.7	+2.0
2年生 (H29)	+0.9 (-1.4)	+14.0 (+10.5)	+2.5 (-1.6)	+2.3 (+1.9)	-1.9 (+1.0)

1年生、2年生ともにおおむね県平均を上回っている。2年生においては、平成29年度の結果と比較して4教科で向上が見られた。

② 生徒質問紙より「当てはまる」と答えた生徒の割合(県平均との比較)

質問項目	1年生	2年生(H29)
ふだんの授業では、自分の考えを発表する機会があると思う。	+12.4	+3.4(+5.3)
ふだんの授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思う。	+9.5	+8.5(+3.1)
ふだんの授業では、授業の目標（ねらい・めあて）を立てて取り組んでいると思う。	+10.7	+7.5(+9.5)

「当てはまる」に「どちらかといえば当てはまる」を加えた合計においても県平均を上回っており、良好な状態であると考えられる。

(2) 校内学習アンケートで「当てはまる」と答えた生徒の割合（7月・12月の比較）

質問項目	1年生	2年生	3年生
授業の中で、ペアやグループになって話し合いをしたり、コミュニケーションをとったりする場面には積極的に参加している。	-2	+5	+2
授業の中で、何のためにペアや小グループになって話し合いをするのかしっかり理解して参加している。	+2	+11	+6
授業の中で、考えが深まったり広がったりしたと感ずることがある。	+1	+9	+4

7月の結果に比べ、ほとんどの項目で向上が見られる。特に「何のためにペアや小グループになって話し合いをするのかしっかり理解して参加している」の項目の伸びが大きい。

5 研究のまとめと次年度の取組

(1) 研究のまとめ

「深い学び」をどのように捉えるのが難しく、教科内、学校全体での共通理解を図ることに時間を費やした。本校がこれまで実践してきた「思考の活性化」と関連付け、各教科で協議していく中で、徐々に「深い学び」の具体の姿が明らかになり、イメージの共有化が図られてきた。また、PADカードを活用した授業研究会の実施により、生徒の学ぶ姿が具体化された。多様な意見を交流し合うことで、授業での課題がより明確になり焦点化できるようになった。

(2) 次年度へ向けて

生徒の学びの深まりにつながる質の高い学習活動を展開するためには、単元（題材）を通して育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりをしていくことが重要である。そのためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善とともに「カリキュラム・マネジメント」の推進を両輪として進めていくことが重要であると考え。そこで、次年度は育成を目指す資質・能力を明確にしたカリキュラムのデザインづくりを進めていきたい。また、小・中・高で授業改善の視点を共有し、互いの強みを双方向で取り入れた連携をより進めていきたい。

